

OTTAVA コンピレーションアルバム Vol 2.「パリのクリスマス」プログラムノートらしきもの

クリスマスにはいつも夢があります。日本とフランスのクリスマスは、宗教的環境の違いから、差違は少なからずありますが、クリスマスがもたらしてくれる素敵な気分は、万国共通です。

このアルバムは、パリのクリスマスのファンタジーを、音楽とともに、おとどけできないかと考え、小さな、物語を考えてみました。

従って、これは、プログラムノート、というよりは、私の勝手な想像、です。アルバムのタイトルも、「作品達」という単語ではなく、「音楽達」としてあります。音楽は、物語を内包しています。どうぞ、情景をイメージーションしながら、聴いてください。

そして次は、あなたご自身の物語を、音楽と共に紡いでください。

ジョウワイユー・ノエル!

本田聖嗣

～収録曲について～

1. ジョスカン・デ・ブレ (1455-1521): アヴェ・マリア

[オックスフォード・カメラータ/ジェレミー・サマリー (指揮)]

クリスマスが近づいてくると、どこからともなく、中世の響きが聞こえてきました。パリを代表する教会がノートルダム (我々の聖母) 教会であるように、聖母信仰は、キリスト教の中心です。

2. アドルフ・アダン (1803-1856): オー・ホーリー・ナイト

[ヴァサーリ・シンガーズ/マーティン・フォード (オルガン)/ジェレミー・バックハウス (指揮)]

街中では、英語で「ホーリー・ナイト」の名で知られる、クリスマスらしい音楽も流れ始めます。

3. ダリウス・ミヨー (1892-1974):

ルネ王の暖炉 Op. 205 - IV. ラ・マウザングラード

[デンマーク国立放送交響楽団木管五重奏団]

雪はそれほど降らないものの、12月は冷え込むパリ。昔ながらの暖炉を使う家は少なくなりましたが、アパルトマンの屋根には、今も昔風の煙突が数多く残っています。サンタクロースは、その細い煙突に入ろうとトライするようです。

4. ガブリエル・フォーレ (1845-1924): 子守歌 Op. 16

[スロヴァキア放送交響楽団/キース・クラーク (指揮)]

大人達はクリスマスプレゼントの交換を、パーティーの会場で、起きているうちにしたりしますが、子供達はパパ・ノエル (サンタクロース) を信じて、早めの眠りにつきます。

5. マルク=アントワーヌ・シャルパンティエ (1643-1704):

器楽のためのノエル H. 534 - 陽気な羊飼い達はどこへ行くのか

[アラディア・アンサンブル/ケヴィン・マロン (指揮)]

フランスの各地では、クリスマスシーズンは「クレッシュ」といって、キリスト誕生の情景を再現した、人形ジオラマが市役所前の広場などに展示されます。このクレッシュでは、羊飼い達たちが、ちょうどベツレヘムの馬小屋を訪れたようです。

6. フランシス・ブーランク (1899-1963): 今日 キリストは生まれ

[エローラ・フェスティバル・シンガーズ/ノエル・エジソン (指揮者)]

生粋のパリジャンであるブーランクは、都会的で洒落な側面と、とても宗教的な面を両方持ち合わせています。クリスマスの晩、彼はどんな様子でしょうか?

7. オリヴィエ・メシアン (1908-1992):

幼な子イエスにそそぐ20の眼差し - 喜びの精霊のまなざし

[ホーカン・アウストボ (ピアノ)]

パリのトリニテ (三位一体) 教会の中では、オルガニスト・メシアンが今晚も演奏しているようです。そして、彼のピアノの代表作が「幼な子イエスに注ぐ20のまなざし」です。たくさんの温かい目が、誕生したばかりのイエス・キリストに注がれています。

8-11. ジャコモ・プッチーニ (1858-1924): 歌劇「ラ・ボエーム」

Act II: オレンジ、なつめやし! Act II: 「レ」の音がおかしいぞ!

Act II: さあ着いたぞ。この人はミミ。 Act II: 私が街を歩けば

[リューバ・オルゴナソヴァ/ジョナサン・ウェルチ/カルメン・ゴンザレス/スロヴァキア・フィルハーモニー合唱団/スロヴァキア放送交響楽団/ウィル・ハンバーグ (指揮) 他]

一方、カルチェ・ラタンという、パリ左岸の学生街では、プッチーニの創作した架空のカフェ「モミュス」に、若い芸術家のタマゴたちが、景気よく繰り出しているようです。既に、小説家ロドルフォとお針子ミミの間にはロマンスも芽生えている様子。大いに盛り上がるカフェ。ミミの友人ムゼッタは、「元カレ」の目の前で、色気たっぷりに歌います。これも、クリスマス・イブの雰囲気のおかげ?

12. ヨハン・ゼバスティアン・バッハ (1685-1750):

クリスマス・オラトリオ BWV 248 - 第2部 シンフォニア

[ファイローニ室内管弦楽団/ゲザ・オベルフランク (指揮者)]

教会の中では、ミサが始まっています。テレビでも、世界各地のクリスマス・ミサの様子が流れています。バッハのオラトリオが響いてきました。

13. ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー (1840-1893):

組曲「くるみ割り人形」Op. 71a - 花のワルツ

[スロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団/ミハエル・ハラース (指揮者)]

パリのクリスマスシーズンのスペクタクルで外せないのは、バレエです。オペラ座の中では、妖精のようなバレエダンサー達が、定番の「くるみ割り人形」の音楽にのって、踊っています。

14. フランツ・リスト (1811-1886):

アレレヤとアヴェ・マリア S183/R68 - アヴェ・マリア

[フィリップ・トムソン - Philip Thomson (ピアノ)]

イケメン・ピアニストとして、パリを魅了したリストも、人生の後半は、大変宗教的な生活を送りました。クリスマスの晩は、彼も古い伝承曲を題材にした「アルカデルトのアヴェ・マリア」を心静かに演奏しているようです。

15. ジャン・フランセ (1912-1997):

フルート、ハーブと弦楽三重奏のための五重奏曲 - II. スケルツォ

[ミラージュ五重奏団]

アパルトマンの中では、楽しそうな大人達のパーティーが開かれています。アルコールも入って、プレゼント交換も済んで、みんな思い思いに楽しんでいる様子が見えます。

16. モーリス・ラヴェル (1875-1937): おもちゃのクリスマス

[クレア・ブリュア (メゾ・ソプラノ)/デイヴィッド・アブラモウィッツ (ピアノ)]

でも、結局、クリスマスの主人公は、子供達なのでしょう。「幼な子イエスの生まれた日」に、明日を夢見て寝ている子供たちに、サンタの格好をしたラヴェルが、愛情を込めて、「おもちゃのクリスマス」を贈ります。この曲は、作曲だけでなく、作詞も、ラヴェル自身なのです。

OTTAVA selection volume 3は森雄一選曲のロックラシック (仮)

2014年12月下旬リリース予定